

て、館岩といふ所にいたる、このあたりの山水の形状、誠に畫景とはいひつべし、

〔日本書紀應神〕三十一年八月初、枯野船爲鹽薪燒之日、有餘燼則奇、其不燼而獻之、天皇異以令作琴、

其音鏗鏘而遠聆、是時天皇歌之曰、訶羅怒鳥之褒珥、椰枳之餓阿摩離、虛等珥菟、句離訶枳、譬句椰、由

羅能斗能斗那訶能異句離珥、數例多菟那豆能紀能紀、佐椰佐椰、

〔會禰好忠集〕戀

由良のとを渡る舟人がちをたえ行へもしらぬ戀の道かな

〔堀河院御時百首和歌雜〕海路

おほしほや淡路のせとの吹わけにのぼり下りのかたほかくらん

權中納言匡房

〔筑紫紀行一〕和田岬からすぎきなんといふ岬をまはりて、午刻ごろ淡路の瀬戸といふ所をゆく、

此瀬戸は幅五十丁ありといふ、淡路島よりは北、舞子濱よりは南にあだれり、舞子濱の方を望め

ば、浪際より小松ども數千本並立て、全く畫景に異ならず、午刻すぐる頃風かはりて、坤の船人ども

もは帆綱引かへ揖とり直して、真切走といふ事をしてゆく、淡路の松帆のみさきの岩屋の鼻と

いふに、ふねをちかづく、この岬も小松ども幾千本ともなくおひしげりて、其中に小き堂有て、堂

の前に石燈籠のならびたるも見えて、景色いとよし、

〔倭訓栞中編十七〕なる。鳴門と書り、阿波の鳴門は淡路に近く、阿波の地つゞきなりしが、波に

きれたる如く見ゆ、尾閭也といへり、莊子に、水莫大於海、尾閭泄之とみゆ、

〔阿波志三板〕山川

小鳴門の。問北泊。距堂浦。千八十。歩許。此

鳴門在阿淡之間。古稱。速吸。名門。日本。書紀。所謂。伊井。諾尊。往觀。者是。也。東岸。斗出。者淡。路行。者嶽。也。西

島畏。之颯。風將。起海。水怒。號聞。于四。方潮。迅去。則漁。艇來。集有。島二。西稱。裸島。勢圓。而小。東稱。飛

島險。絕不。可陟。裸島。之南。磯石。平數。十餘。丈呼。曰千。疊鋪。西屋。平坦。有礎。石即。公駕。遊憩。之處。